

「タルテュッフ」と宗教

徳 村 佑 市

ルイ14世は1664年5月7日から13日まで一週間にわたってヴェルサイユで「魔法島歓楽」と銘うった大饗宴を開いた。これは表向きは母后アンヌ・ド・オートリーシュと王妃マリー・テレーズを慰めるという名目であつたが、その実は当時ルイ14世の寵を一身にあつめていたド・ラ・ヴァリエール夫人を楽ませるのが目的であつたと言われる。この饗宴の第六日目（即ち5月12日）に「タルテュッフ」三幕が初演された。

これより前4月17日に、「聖体秘蹟協会」（不信心や自由思想と戦うために作られた団体、一これについては後にもつとくわしくふれる。）の会員達はラヴァル侯爵邸に集つた。そのメンバーの若干の者が王の側近に暮していたので、情報を得るに早かつたこの信者の団体のメンバーはそこで集合して、その時メンバーの一人から宗教を脅す危険について報告があつた。しがな職業の著者が、ぶしつけにも僧や教導者を滑稽な、おぞましい姿に描き出そうとしているというのである。そこで集つた人々は、かような事は放置出来ないとし、あらゆる手段で干渉し、悪が成就しないようにすることで意見が一致した。

協会の修史官アルジャンソンの伯爵ルネ・ド・ヴォイエ・ド・ポールミイは「人々は『タルテュッフ』という邪悪な劇の禁止のために働くことを強く話した。各人はその上演を妨げるため宮廷に信用を持つ友人達に話すことをひきうけた。」と語っている。①しかしそれは遅すぎた。それは王に支持されて5月12日にヴェルサ

ィユで初演された。しかしこれを上演させてみて、王は信者達からの強い反対に直面せねばならなかつた。聖体秘蹟協会に多少とも大びらにおかれて、王の昔の師傅、パリの大司教アルドゥアン・ド・ペレフィックスはその反対の先頭に立つた。若い頃の事を忘れて、こちこちの信者になつていた母后アンヌ・ド・オートリーシュも干渉したであろう。王はそこでこの作品の上演を禁止することを決心した。ラ・ガゼット・ド・フランスは5月17日号で次のように報じた。

「陛下はすべての事に完全に明るくあらせられ、宗教に対して全く有害で非常に危険な結果を生む可能性がある^{イボクリット}と判断された『偽信者』という劇を上演させるのを禁止された……………」②

「魔法島歓楽」の模様をしるした報告書はこれについて次のようにしている。「夜（即ち1664年5月12日の夜）陛下はモリエールが偽信者にあてつけて作つた『タルテュッフ』と題する喜劇の最初の三幕を演ぜしめられた。国王はそれを大真変面白いと思ひになつたが、その信仰によつて天上世界に到る途上に置かれた人物と、善行に対する空虚な衒気が悪行を犯すのを少しも妨げないような人物とは多くの点で合致することを御存知であり、宗教に関する事柄に対する自己の極度の敏感さは、混同される可能性ある悪徳と美德とのこの相似を忍ぶ能わざることを承知あらせられて、著者の良き意図は疑われなかつたけれども、この喜劇が完成し、それを判断する能力のある人によつて検討されるまでは公衆に向つてそれをお禁じになり、正し

い判断を下す能力の少い他のものがそれを見る楽しみを濫用しないように自分でもその楽しみをお慎しみになつた。」

5月12日の「タルテュッフ」の上演とそれにつづく禁止を知つてサン＝バルテルミイの司祭ピエール・ルーレは彼なりにこの劇の批評をしようと考えた。そして彼はこの作品と作者の上に宗教的、法律的きびしさを下すのを自分の義務と考えた。ソルボンヌの博士であるピエール・ルーレの治めるサン＝バルテルミイの聖堂区はパリに於てもその信仰の熱烈さでぬきんでていた。当時の田舎の司祭の大部分はかろうじて読むことが出来た程度であつたが、パリの司祭達は一般にずっと教育があり、ほとんどがブルジョアジーの出身であつた彼らは個人的道徳と職業的熱心さで秀でていた。しかし一方では信仰の弱化と風俗の弛緩に対して戦闘的に戦つているところから、彼等の大部分は不寛容でも秀でていた。

そして彼らはこの戦いをすすめる上に於てジャンセニスムの方に傾き、ジャンセニスムの教義の厳格さと道徳の厳格さは彼等には自分の仕事にとって有利であるように思われた。「聖堂区のこの精神を流行させたのはジャンセニスムの精神であつた。聖堂区のこの精神はパリに於て大変強かつた。パリに於ては司祭達は非常に重要となつたので、彼等は大なる者を恐れさせ、小なる者を尊敬させ、総ての人によつて尊重された。」とラパン神父は言つた。③ルーレ司祭の牧するサン＝バルテルミイの聖堂区はこのパリに於ても宗教的熱心さで秀でていた。

このピエール・ルーレは1663年以来、「光栄の人、別名永遠の光栄により人間の到達しうる最高の完成」という大部の本を準備中で、既に1664年4月24日に出版許可を得ていたが、「タ

ルテュッフ」事件が起るや否や、自分なりにその意見を發表し、「タルテュッフ」の作者を難じ、それを禁止した王をたたえることを時宜に適した処置と考え、大急ぎで「世界に於ける輝かしき国王、別名世界のすべての国王中最も輝かしいルイ14世」というパンフレットを草し、それをあわせて8月1日に印刷を完了した。そして三ヶ月近く前から④フォンテヌブローにいたルイ14世に8月の最初の二週間の間にそれを手渡した。サン＝バルテルミイの司祭がモリエールを攻撃したこのパンフレットは激越を極めたもので、それは不当であるどころか、滑稽さ、不条理さにすら達している。そしてそれと同時に、「タルテュッフ」の著者に関して王が実際持つていたのと非常に異つた意見を王に帰している。

「陛下は今、美しく、甘美で、愉快で、完全で、あらゆる部分が完成され、その栄光のため欠けるものがないよう注意をはらわれたフォンテヌブローの王宮にいられます。しかし陛下はその心の偉大さ、その信心、陛下が神と教会にはらわれる敬意、そして救いに必要な恩寵を授けるためにそれらのかわりに使われる代理者に陛下が進んで与えられる敬意に真にふさわしい、英雄的で王者にふさわしい行為の後にのみそこへ行かれました。

一人の人、あるいはむしろ肉を着、人間の皮をかぶつた悪魔、そして過去の世紀の中にかつてあつた最も札つきの不信者あるいはリベルタンが、すべての教会を嘲弄して、最も聖なる性格と最も神々しい役目を無視して、魂の成聖のため救世主によつて命ぜられた教会に於ける最も聖なるものを無視して、その慣用を滑稽な、軽蔑すべき、いやらしいものにするために、劇場で上演させることによつて公表するばかりの

作品を、彼の悪魔的精神から出させるに充分な不信と嫌悪すべきものを持ちました。彼はこの瀆神の不信な企てによつて、賢明な案内人と信心深い教導者による魂と家族のみちびきであるところの最も宗教的な聖なる実行を非難し、物笑いにしながら、カトリック教を破壊しに行く神に対するかくもひどい大逆罪をつぐのうために、みせしめのための公の極刑、そして地獄の火の先ぶれである火刑に値します。しかし陛下は強い怒りをこめて厳しい非難を彼にされた後、神の本質的やさしさをまねる平素の寛仁な御行為によつて、彼に対し廃止によつて彼の無礼を許し、一生それについて公けの厳しい悔悟の時間を与える為に彼の悪魔的な大胆さを許されました。不敬で反宗教的な産物、放縦な彼の詩を見せたり、小売りしたりする事を成功裡にとめるように、陛下は彼に作られた総てのものを削除し、破壊し、圧殺し、燃すよう命ぜられました。そして未来に於てかくも不埒な名誉毀損の何物も作らないよう、又神に対して有害で、教会や、宗教や、秘蹟や、救いに最も必要な役目を果す人々にかくも侮辱的な何物をも白日の下に生み出さないよう命ぜられました。そしてイエス・キリストが十字架の死によつて人間に得させた恩寵の水路である秘蹟、それによつて恩寵が神聖にみちびかれる信者の魂の中に移され、そそがれる秘蹟にはらうべき尊敬や、神の名誉や、教会や宗教への尊敬に打撃を与えることよりも、陛下にとつてより不愉快でいやなところの、最も陛下の御心にふれるところの何物をもすることも言うことも出来ないだろうと、公けに彼に対し、全地上に対して宣言せられました。陛下はかくも賢く敬虔な熱意、かくも地獄的な罪の憎悪を彼に示されることよりも、この不信者の不信心に対してよりよくする

ことが出来たでしょうか……」

このパンフレットは大変激越なものであつたので、信者達の怨みを買わないよう用心していたルイ14世も、その発行停止と破壊を命ずることを全儀なくされた。

この「タルテュッフ」の禁止とピエール・ルーレの非難に対し、モリエールは「喜劇タルテュッフに関して王にたてまつる第一の請願書」を草して王に訴えた。この第一の請願書はジャン・モンヴァルの「モリエール年表」によれば8月31日に出されたと言われる。⑤

「この作品の禁止は私にとつては手痛い打撃でありましたが、私の不幸は陛下がこの問題につき意のあるところを説明して下さいましたその御態度によつて和らげられました。陛下、私は、この喜劇を公けにすることを禁じはしたが、そこに何等非難すべきものないと明言される御好意をいただきましたことによつて、陛下は私が嘆くべき理由を一切とり除いて下さつたのだと信じたのであります。

然し、世界で最も偉大で、最も聡明な国王陛下のこの光栄ある御宣言にも拘らず、又私が自作の特別朗読を行いました節、皆陛下の御意見に一致すると申されました法王使節貌下ならびに司教各位の大部分の方々の御承認にも拘らず、さよう、そうした総ての事にも拘らず………の司祭の書きましたある書物が、公然とこれら総てのおごそかな証言を否認しているのが見られます。陛下の御言葉も空しく、また使節貌下や司教各位の御判断も空しかつたのであります。彼は私の喜劇を見もせずして悪魔的なりと言い、私の頭脳も悪魔的だとしております。私は肉を着、人間の皮をかぶつた悪魔、リベルタン、見せしめの刑罰に値する不信者とのことです。火が私の侮辱を公然と償うだけでは不充

分で、それで罪滅しが出来ては安きに失する由であります。この善徳の紳士の慈悲深い熱意はそこにとどまるどころではありません。彼は私が神の仁慈をうけることを欲せず、どうあつても私が地獄におちることを欲するのであります。それはきまつたことであるとのことです。」

このように「タルテュッフ」は宗教の側に立つ人々との間に問題を起したのであるが、それでは当時の宗教界の姿勢はどのようであつたか、宗教界は「タルテュッフ」のみならず演劇そのものをどう見ていたかを見て見よう。当時の若い人々、とくに上流社会の人々は自分達の情熱の反映を見出しうる演劇を見るのを好んだが、懺悔聴問僧や良心の教導者はそれを妨げるのに大わらわであつた。しかしその懺悔聴問僧や良心の教導者の熱意や厳格さにも程度の差はあつた。カトリック教徒の間に於ても不道德で人を腐敗させる演劇に対する憎悪を皆が同じ程度に感じていたわけではなかつた。頑固で厳格な人々もいたが、又寛大な人々もいたのである。たとえばジェズエイトの大部分は後者であつた。

ジェズエイトたちは一般に上流社会の出身で、その社会の習慣や趣味を身につけていた。とくにジャンセニストが非難した観劇の趣味を身につけていた。ジェズエイト達はその学校で劇の上演をしたが、それは学校的、教育的なものだけではなかつた。彼らは女なしでバレエを演じたりした。彼らはしまいには金をとつて観衆を入場させ、その金額はコメディ・フランセーズのそれに匹敵するほどであつたと言われる。⑥

同じジェズエイトではあるがブルダルーは「タルテュッフ」に対して厳しかつた。彼は次のようにその説教の中で述べている。

「真の信心と偽の信心はそれらに共通である多くの行為を持つので、一方と他方の外観はほとんどすべて似ているので、一方を攻撃する同じ嘲笑が他方に関係すること、人が一方を描く線が他方にも関係することが容易であるのみならず、又殆ど必然の結果である。悪意ある解釈によつて真の信仰に不当な疑いを抱かせながら、世俗の精神が偽信を非難しようと企てた時起つたことがそこにある。劇場で一般の嘲笑に想像上の偽信者をさらしながら、彼のうちに最も聖なるものを嘲笑しながら、彼に於て突飛な風に世紀のスキャンダルを非難させながら、最も大きな罪におもむくの、より重要でない点について繊細細心なまでに良心的である彼をあらわしながら、その卑劣さをおおうにのみ役立つた悔悟者の顔の下に彼を示しながら、彼らの気まぐれにしたがつて最も厳しい信仰の性格を彼に与えながら、しかし心底では最も欲得ずくの最も卑しい性格を彼に与えながら彼らが主張したことはこれである……………」

このブルダルーの言葉はジェズエイト全体の意見というよりも、真面目な信者たちが抱いた見解と考える方が妥当であろう。パスカルによつてジャンセニストを判断すべきではないように、ブルダルーによつてジェズエイトを判断すべきではなかろう。その生活が長い善行の連続であり、犯罪人を訪ね、貧者を助けるためにのみ説教壇をはなれたこの聖なる説教師ブルダルーはその道徳の厳しきで秀でており、演劇を非難したのである。

このようにブルダルーは彼がその中に宗教の敵を見る「タルテュッフ」の著者に対して厳しかつたのだが、その同僚のジェズエイトの中には彼をより寛大により正当に扱つたものもいた。ラパン神父は「それは我々の仲間の一人で

ある。」と言つたし、ブール神父は彼の墓碑銘を作つた。⑦一般に親切で、妥協的で、原則的に党派的でない良い神父たちは魂をあまり厳しく取扱わない方がよいこと、余りにももろい良心をつつけんどんに取扱つてはいけないこと、そして余りにも間歇的な徳を失望させてはいけないことを知つていた。そしてたえず損失を少くする事に努めていた。その点から彼等は演劇にも満足していた。

この性質はジャンセニストのもとでは発見出来なかつた。この人々は不屈であつた。人間としては大変尊敬すべきであり、彼等が自らに課した厳しさによつて尊重されるべきではあつたが、ポール・ロウィヤルの隠者達は宗教的熱意の過剰のあまり、自らに課した厳しさを人にも課し、厳しい論戦を展開した。彼等は犠牲と罰とについての話し、彼らを案内者とした人々に対し無慈悲な神を示した。そして彼らは天国への道を茨でふさぎ、人々に後悔とおそれと悲しみのみを吹きこんだ。そしてこの生を死への単なる通路、死への準備として教えた。花園を荒す狂人のように、我々の生活の中にある庭の花、この世を少しでも住み易く、堪え易くするようなあらゆる物を破壊しようとした。彼らは最後の審判と両立しないと判断するものをことごとく非難し、死を考えるためにのみ生きた。彼らは恋を非難した。又友情がそれにふけるあまり人を神よりそらす時には友情をも非難した。そして又世俗のすべての快樂を非難した。その世俗の快樂の中で彼等が最も信用しないものの一つは演劇であつた。それは罪ある情熱を助長するために憎むべきであるとともに、ジェジュイットがそれに対して寛大で、それを支持しているがためになお憎むべきものであつた。そして彼等は演劇芸術に対する戦いを企てた。

ポール・ロウィヤルの紳士達に対してデマレ・ド・サン＝ソルランの攻撃によつて起された論戦の間に、ポール・ロウィヤルの人々はニコルの筆で詩人、小説家、劇作家を「肉体ではなく魂の公けの毒害者」として扱いながら激しく打返した。ニコルは又しばらく後「演劇論」を出し、彼の演劇に対する攻撃を再び強調した。「演劇とは悪徳の学校であり、練習である。俳優の仕事はキリスト教徒にふさわしくない仕事である。それを行う人々はキリスト教徒たることを捨てることを余儀なくされる。……この職業はキリスト教に反する。……」この論文につづいて1667年もう一人のジャンセニスト、コンチ公は「宗教会議や聖なる神父たちよりひかれた教会の伝統にもとづく演劇や興行物に関する論」を出したが、これもニコルのそれと同じ傾向のものであつた。それはただ筆による攻撃や侮蔑にのみとどまるものではなく、必要とあらば行為にも翻訳される教義であつた。モリエールがデビュー当時、まだ改宗していないコンチ公の元に滞在していた時、アレの司教ニコラ・パヴィヨンのジャンセニスト的偏見によつて彼の寵愛がおびやかされ、その地位が失なわれたこともあつた。⑧

ポール・ロウィヤルはその反自由主義的、反文学的思想を宣伝する為に書物にのみ頼つてはいなかつた。彼等はその説教師や良心の教導者を持ち人々に働きかけた。上流社会の人々、特に女性はそれらの説教に影響されて、財産の一部を寄進したり、かくれがを求めに來たりした。中には女信者や修道女の教導者に対する熱心さが宗教の枠を越えて人間的な情熱を示すことさえあり物議をかもすこともあつた。ともあれ、男たちに見捨てられたので神に近づくとした女達は厳しい悔改めを自らに課する為にジ

ジャンセニスムの方へ向いたし、他の人達もそれにならつた。彼等は流行にしたがつて、パスカルのものや、アントワーヌ・アルノーの著書を小説を忘れて読みふけつた。セヴィニエ夫人も時流を追つて全般的な熱中に身を委ね、時代の好みにしたがつて自分の救いの為に聖オーガスチンやジャンセニウスのものを読んだと言われる。結局まじめであろうと見せかけであろうと、男であろうと女であろうと、アルシノエやベルネル夫人によつてあらわされようと、オルゴンやタルテュッフによつてあらわされようと、17世紀に於する信仰はとりわけジャンセニスト的であつた。

ポール・ロワイヤルの隠者達の及ぼした深い影響や、宗教的無関心や風俗の弛緩に対する彼等の反対運動の結果として、パリにも田舎にも非常に厳格な信者が一杯であつた。この人々はしばしばジャンセニスムの教義を採用することなしに彼等の道徳に近づくとした。この意味では本物のジャンセニストとはやや異り、ある面でのみそうなのに過ぎないのであるが、こういう人々をも人は同様にジャンセニストと呼んだ。

この道徳の面におけるジャンセニスト、その生活方法では接近し、宗教的無関心者や不信者に反対して結合していたこの広大な党派に前に述べた「聖体秘蹟協会」が結びついていた。

聖体秘蹟協会は1627年ヴァンタドゥル公アンリ・ド・レヴィによつて創設された。彼の良心の教導者カプチン会修士フィリップ・ダングモアやオラトリオ会士コンドラン神父らの意見に助けられて、不信の発展や風俗の頹敗と戦いながら、カトリック教を宣伝し、それを建て直そうとした。1630年に起草された規約はそれが向う目的を示している。

「協会は慎重さと眼識が仕事において与えねばならない制限以外のいかなる制限も持たない。それは貧者や病人や罪人や苦しむ者のための普通の仕事においてのみならず、伝導団や神学校において、総ての醜聞と不信を妨げながら世界の総ての部分において異端の改宗と信仰の宣伝の為働く。……………」⑨

このためには社会のあらゆる層に網を張りめぐらし、無信仰者、異端者を探し出し、家庭の隠された不道徳を暴き出し、僧侶の会員は説教を通じて、法曹階級に属する会員は司法権を通じて、宮中に出入する者はその手蔓を通じて、あらゆる不信、背徳者を教導し、追放しようとした。彼等にとつては総ての作品の上演、特に喜劇の上演はスキャンダルであり、不信であつて、多分協会の一員であつたパリ高等法院の弁護士ブルドロは1660年に、王の顧問官ヴワザンは1671年に演劇に反対して書いた。17世紀は宗教戦争のあとをうけてカトリック的反動が強かつた時代で貴族、僧族、法曹階級、軍人の有力者がこれに力をかけたので協会は次第にその勢力を伸ばした。

リシュリユーによつて認められて、この信者のグループは1631年5月13日付の王の印をおした命令の手紙で合法的存在となつた。国王の公書を求めればより厳粛ではあるが高等法院の合法的な干渉を伴うので、公開されることを欲しなかつた会員達は王の印をおした命令の手紙で満足したのである。この公開を欲せず秘密結社であることが、この協会の特色であつて、協会はその存在が露見することを恐れて、規約さえ印刷しなかつた。そしてその事は同時に協会の力であるとともに弱点でもあつた。貧者を助け、病人や囚人を訪れてそれがどんな善をなそうと、反面そのひそかな干渉によつて公の権力

や教会を恐れさせ、その反感を買った。

いくらかの会員が加担し、他が非難していたジャンセニスムによつて特に惹き起されて分裂が生じ、脱会や追放があつた。残つた人々、その熱心の過剰によつて異彩を放つた人々に対し、反対派はその秘密性を非難して「目に見えざる者」と呼んだ。

彼らは国事にも立ち入り、フロンドの乱の間、ヴァンサン・ド・ポールやその他と共にマザランをアンヌ・ド・オトリシュから離そうとして母后に彼の事をいろいろ悪しざまに言つた。マザランは彼らを打ち倒そうと決心し、遂に1660年12月10日、パリの高等法院に、国王の許可を受け高等法院に登録してない一切の結社の集会を禁止する旨の布告を出させた。書類上で禁止されたが、協会はなお存在し、ひそかに影響をひろげつづけた。誠実な人々はそれを捨てたが、野心家や偽信者がそれを利用した。マザランが死んでルイ14世が親政を宣し、コルベールが国政をとつても聖体秘蹟協회를根絶しようとする政府の方針にはかわりなく、1665、6年頃には協会の活動は事実上終熄した。

モリエールはパリや田舎でこの協会を知つていた。その指導者達は彼から大衆を奪い、彼の職業を妨げ、彼の作品の上演を妨げようとしたので、彼がそれに対してどんな気持を抱いていたかは察するにたかくない。

以上が当時の宗教界の大勢であり、宗教界が演劇をどう取扱つていたかの概観である。このことは「タルテュッフ」の序文にあらわれたモリエールの言葉にも反映している。モリエールはそこで次のように述べている。

「それこそ（一切の喜劇を誹謗すること）しばらく前から人々が狂気のように熱中していることで、演劇に対して人々がこんなに激しくく

つてかかつたことはかつてなかつた。私は演劇を非なりとした教会の神父がいたことを否定することは出来ない。しかし又人々は、それを少々よりおだやかにとりあつた若干の神父もいたという事を否定することは出来ない。かくして人々が非難を根拠づけようとして援用している権成は、この意見がわかれているという事実によつて壊されてしまう。同一の光によつて照された精神の間に存在するこの意見の相違から引き出し得る結論は、彼等が演劇を違つた風にとつたということであり、或る者はそれをその純粋性に於て考察したのに、他の或者はそれを腐敗の状態に於てながめ、正当にも醜惡な見世物と人々が名づけたあの総ての凡俗な興行物と混同したということである。」

以上見てきたように17世紀に生きた劇作家としてモリエールは宗教とは無縁ではあり得なかつたわけであるが、それでは当時の宗教に対してどのような関係を持ち、どのような立場にあつたのであろうか。

サント＝ブーヴはモリエールの中に「分別のある、おだやかな宗教的素地」を見erると思つた。「彼はサン＝タマンやボワロベールやデバローの放縦なシニックなあのだぼらの何物をも持つ筈はなかつた。」と言つている。^⑩

ジャン・モンヴェールの「モリエールと教会」によれば、かなりよく宗儀を守り、1622年1月15日にサン＝ウスタッシュで洗礼を受け、パリや田舎の教会で十度くらい教父をつとめ、1672年4月の復活祭に聖体を拝受し、この時期にサン＝ジェルマンの僧ベルナル氏を出入の聴罪司祭として得て、良いカトリック教徒として生きたモリエールが示されている。^⑪又、エミール・ファブルは「正式の聴罪司祭を持ち、毎年復活祭を祝つたモリエールをどうして不信者、

瀆神者と呼ぶのか。」といとも簡単にモリエールと宗教の関係を解している。^⑫しかし問題はそれほど簡単ではない。宗儀を守るとは必ずしも信ずることではない。モリエールは彼の置かれていた位置と、彼が仕事を行う上に必要とした王の保護と正統的な人々の支持の為に実際以上に宗教的に見えることを余儀なくされなかつたであろうか。

モリエールはたとえ彼が宗儀を守つたとしてもあまり熱心なキリスト教徒ではなかつたことを示すよう幾つかの証拠がある。モリエールの最良の友はリベルタンとして著名なシャペルである。モリエールは又無神論者の評判を持つラ・モット・ル・ヴェイエをしばしば訪れる。彼は又信者たることを好まず、その不幸を信者のせいにするダスウシイと結ばれている。彼はクロワ＝ブランシュの才人達の仲間の一人であり、その人々は自分達の主領として哲学者で無神論者のデパローを認めている。^⑬

彼は又、ガッサンデイ（エピキュールの弁護者であつたが、その反面義務に非常に熱心な僧であつた。）の弟子であり、リュークレースの散文をラテン語より翻訳した。それは当時としては出版が不可能な程大胆なものであつたと言われる。こういう証拠からすればモリエールはあらゆる信仰から解放されて無神論者であつたと言えるだろうか。少なくとも「タルテュッフ」なる作品から見る時はそういう事を断定する事は出来ない。モリエールの無神論はそれを認めねばならぬ場合でさえも、しつかりと心の中にしまわれ、いかなる痕跡も作品の中にはあらわれてはいないのである。^⑭

モリエールと宗教との関係を調べて見ると、その敵対関係は彼が演劇人として出発した当初、マドレーヌが彼を舞台に迎えた時にさかの

ぼる。彼は演劇人となるとともに社会の除者となつたのである。^⑮当時は真面目な信者であろうと、偽信者であろうと、すべての信者は二つの点で一致していた。それは滅亡の根源とみなされる演劇への憎しみと、この憎しみから由来する俳優への軽蔑であつた。中にはジェズイットのように演劇を大目に見る者もいたが、一般には演劇を嫌わなければ良いカトリック教徒とは言われなかつた。このような社会風潮の中で演劇に投ずる事は社会の除者となることであつた。当時モリエールは若さに満ちていたためにそれを余り意識しなかつたかもしれなかつたが、それが心に痕跡を残さなかつたとは言えないだろう。

それから12年後、1656年彼がまだ田舎にいた時、彼は更に大きな打撃を打けねばならなかつた。彼が保護を受けていたコンチ公が改宗したので、彼は自分の職業上の貴重な保護を奪われたのである。^⑯彼はこの時も自分の職業を否定してくる宗教の力を痛感させられたに違いない。宗教との敵対関係といつてもこれまでは受身の関係であつたが、1660年5月22日に初演された「スガナレル、一名疑り深い亭主」ではモリエールは1588年に死んだスペインのドミニック教団の僧の書いた本で、1658年の版で再び流行し、良心の教導者達によつて大變信者にすめられていた書物、「罪人の導き」を嘲弄した。しかしモリエールが書いた作品で信者の側からの反撥がはじめて現れるのが見られるのは1662年12月26日に初演された「女房学校」においてであつた。

この作品に於てはアルノルフは自分が後見人として育て、さらにめとろうとしているアニェスから愛される為に長々と説教をし、「身持ちの悪い女は地獄の煮えたつた大釜に投げこまれ

る。」と脅文句を並べるところがあるが、これは最も偏見の少ない精神の目にも説教壇の雄弁なパロディであり、キリスト教の主要なドグマの一つの諷刺として容易に通ることが出来るし、事実これは説教を戯画化したといつて非難されたものである。又、アルノルフが自分がめとろうとする若いアニェスに妻としての心得を持たせる為に読ませた「結婚庭訓」と題された十余ヶ条はランソンの研究によれば、聖体秘蹟協会に加入してこちこちの信者になつた文学者デマレ・ド・サン＝ソルランの訳になるナジアンズスの聖グレゴリウスの「オランピアに与うる訓え」と題する書のパロディにはかならないといわれる。⑰こうしたモリエールの態度に対する宗教の側からし反撓は「女房学校」をめぐる展開された「喜劇戦争」の表舞台にさほど大きく姿をあらわしてはいなかつたけれどもかなり隠然たるものがあつたらしく、1663年6月1日に演ぜられた「女房学校批判」の中でモリエールはリジダスに「説教と庭訓は滑稽なもので、我々の宗教的秘義に対して払わねばならぬ尊敬を損うものではないか。」と言わせてその事を確認している。

このリジダスの言葉に対して「女房学校批判」の中で「女房学校」の擁護者ドラントは「君が説教と呼ぶ道徳的な話については、それを聞いた本当の信者は、それが君の言うものを損つていないと見ていませんよ。それから（地獄）だとか（煮えたつた大釜）だとかいう言葉は、アルノルフの無法さと、彼が話しかけているアニェスの無知によつて十分正当なものとなつていと思います。」と言つている。このような態度をとつているもののモリエールは宗教の側からする批判にはかなり神経質で慎重な態度を示し、又「ヴェルサイユ即興劇」ではモリエール

自身言葉として「しかしそのすべてのものを彼等に与えるのだから、彼等は爾余の事は私に委ね、彼等がその喜劇の中でそれについて私を攻撃したと言われるような事柄には触れないようにしてもらいたいのだ。」と言つて余計に宗門を刺戟するような言辭を弄する攻撃者に真面目な怒りを見せているのである。このように「女房学校」ではモリエールは宗教の側の反対に出会うのであるが、後にも述べる通り、当時の宗教の内部にもいろんな考え方があつたのであるから、この作品をもつて一概に宗教を攻撃したと考える方が妥当であろう。

モリエールと宗教の関係を問題にする場合、その次に来るのが「タルテュッフ」である。「タルテュッフ」が初演されたのは1664年5月であるから、1662年12月に初演された「女房学校」から見ると15、6ヶ月の時が流れている。しかしこの両者の間には「女房学校批判」「ヴェルサイユ即興劇」「無理強い結婚」の三篇が介在している。

前二者は「女房学校」をめぐる論争の産物であり、「無理強い結婚」はルイ14世を楽ませるため大急ぎで作られた笑劇系の作品であるので、モリエールが「女房学校」の後、本格的に想を練つて取組んだのはこの「タルテュッフ」であると考えても良からう。この「タルテュッフ」は初演されるかされないうちから聖体秘蹟協会の反撃の動きがあり、その他、当時の宗門の側からピエール・ルーレやブルダルーの反撃や批判があつたことは我々の見て来たところである。それに対しこの喜劇の序文の中で、モリエールは自分は尊敬すべきものを愚弄する意図は持たず、ただ偽信者を攻撃したのでであると反論している。この問題、モリエールは「タルテュッフ」に於て偽信者のみ攻撃したのである

か、それとも真の信仰をも攻撃したのであるかについては後世に於ても意見のわかれるところで、それについて小場瀬卓三氏の論文によつて概観したい。^⑮

小場瀬氏は先ずブリュヌチエールの説をあげている。それによればブリュヌチエールはタルテュッフがやつと三幕になつて登場するのに、オルゴンは劇の最初から現れ、終始主要な位置を占めて劇行為は彼によつてリードされていることに注意し、従つて作者の意図はタルテュッフ同様、彼の中に求められなければならぬとし、次のように論じている。

即ち、タルテュッフに会う以前のオルゴンはフロンドの乱の時に王の為に働き、勇気のあるところを示したように決して痴人ではなかつた。彼は良き夫、良き父、良き主人で、親友の生命や名誉にかかわるものを委託される程の良き友でもあつた。ところがタルテュッフに出会つてからは総てが逆転した。若い妻の寛大な夫は無関心な怒りつばい夫となつた。やさしい父親は家庭的暴君と変つた。名誉を重んずる人間は不実な保管者となつた。オルゴンは真面目であり、彼の信仰は真面目であり、一瞬も不正直な偽信者の特徴の下には示されていないのであるから、これは彼が信仰において進歩すればする程非人間的になつたことを意味する。そしてタルテュッフがこの事業をなしとげたのである。オルゴンの娘と結婚しようとしながら、その妻をくどくタルテュッフではなく、我々がまだ見かけるか見かけないかの段階にあるタルテュッフ、キリスト教の用語によれば、俗世からの離脱、自己放棄、神への純愛を説く人としてのタルテュッフのしたことであると。このことからブリュヌチエールは、モリエールは「タルテュッフ」によつて単に偽信者ばかりでなく、

真の信者をも、宗教そのものまでも攻撃したのだとし、そのよつて来る原因を求めて、モリエールの哲学にこれを見出している。

ブリュヌチエールの見る所によればモリエールの哲学は自然の善性を信じ、「なすがままになさしめる」ことを最高の原則とするラブレーの自然哲学であり、それは宗教が人間に課する一切の羈絆を蛇蝎視するものである。小場瀬氏はブリュヌチエールの所説は「タルテュッフ」を以て反宗教的な作品と考える側の中でも最も代表的なりとし、エミール・ファージェも若干の留保を付して彼の説を承認しているし、ジュール・ルメートル、レミ・ド・グウルモン、コクランの見解も彼の所説と大体軌を一にしていると述べている^⑯

これと正反対の見地はギュスターヴ・ミッシュォオによつて代表されると小場瀬氏は考える。^⑰それは真の信者と偽の信者を区別し、「タルテュッフ」は後者にのみ向けられたものであるというモリエールの言い分をそのまま受取る解釈である。そして劇中に於てはクレアントの言動が作者を代表するとなす見地である。ミッシュォオは次のように述べている。即ち、そこには良識と理性の道德、社会生活と社会生活が課する適応の道德、中庸の道德が見出される。この物のわかつた、程のとれた、穏当な、中庸の見解はキリスト教道德と合致するのではないか。モリエールの道德とカトリック道德との間に対立を見たときと仮定すべき如何なる理由もないと。

以上の二つの見解のうちいずれを正しいとすべきかを問うて小場瀬氏はそれをモリエールの作品の系列の中に於て研究すべきであるとする。^⑱「女房学校」及びそれと姉妹関係にある「亭主学校」の主題はいうまでもなく婦人の教育と結婚の問題であつて、モリエールは子女を

育てるには寛容をもつてのぞみ、結婚に当つてはその意志を尊重すべきであることを強く主張したのである。モリエールがこれを主張した所以のものは当時においては両親は子供に対して現在よりも遙かに大きな権力を有していたのであり、結婚に於て彼等を動かしていたものは子供達の運命に対する顧慮ではなくて、野心や、名誉心や、利害や、富や、勢力であつたからである。法律は父親の命をきかぬ子供を廃嫡することを認めていたし、女の場合は嫁資なしに嫁ぐということは出来なかつた。だから両親の意に背いて、自分の好きな相手と一諸になるということは、当時の社会にあつては大きな醜聞であつた。そしてこのような風潮は上流社会に於ても町民社会に於ても大差のないものであつた。

そして教会はむしろ両親の味方であつたので、このような風潮の中で子供の人格と感情を擁護した「亭主学校」や「女房学校」に於けるモリエールの考え方は、エラスムスやラブレエやモンテニユ等のルネッサンス的思想、ルネッサンス的人間観に結びつけるべきであり、17世紀に於てはカトリック的道德と対蹠的地位に立つていたと見るべきだと小場瀬氏は論じている。^{②②}このことはモリエールの婦人教育に関する考え方と、サン＝シールに学校を建てて子女の教育に当つた信仰深いマントノン夫人の教育方針を比較すれば自ら明瞭となるであろう。サン＝シールは尼僧を作ることを目的としたものではなく、家庭人となるべき女性を育てることを目的としたもので、所謂宗教教育は当時の宗会の経営する学校に較べてより少い部面しか占めていなかつたのだが、その規則は僧院的厳格さを持つていた。外出は許されず、両親でも年4回、一回30分間だけ訪問することを許され

た。ラシーヌの「アタリ」,「エステル」が上演されたことがあつたが、芸術による情操教育が大きな役割を演じていたわけではなく、そういうものは間もなくしめ出された。学課も読み書き計算が出来る程度には授けられたが、それ以上は好遇されなかつた。その他の大部分の時間を占めるものは裁縫その他の手仕事であつた。「女房学校」でアルノルフがアニェスを育てたのもこれに似た方針で、女の無智は貞操に対する最上の保証であると確信しているアルノルフは彼女を四つの時百姓女から貰い受け、「人里離れた小さな僧院で、出来るだけ馬鹿に育てるように」してもらふ。アニェスはそこであつたと裁縫を仕込まれたと見えて、アルノルフが留守の九日か十日の間にワイシャツ六枚に頭巾六つをこしらえる。アルノルフはそれを見て上首尾だと悦に入っているのである。しかしアルノルフの用心も無益であつた。アニェスはオラースを見て惚れてしまい、これと一諸になつてしまう。

これによつてモリエールは女を世間知らずに馬鹿に育てさえすれば、女の操と夫の名誉が保証されると考えるのは愚かな事で、「亭主学校」のアリストが言うように「世間という学校で勉強させ」、自分の事は自分の責任において考えるよう仕向けた方が、結局徳性堅固な人間を作る所以であるとの思想を表明したのである。

このようなモリエールの人文主義的道德は17世紀のカトリック的道德との間にどんなに相容れない要素を持つていたにせよ、モリエール自身はこの対立をそれ程明確に意識していなかつたというのが小場瀬氏の説である。^{②③}モリエールは劇作家であり、俳優であつたので、現実の結婚生活や家庭生活の中にいろいろの不幸や不

合理を見、我々の道徳がもつと人間的になるならば、そうした不幸や不合理は改善されるであろうと主張したのである。そしてその事は彼にとってはキリスト教を信じ、善良なるキリスト教徒として暮すことと何等矛盾するものではなかつた。それ故ブリュヌチェールの解釈はモリエールの思想をルネッサンス的自然哲学のそれであるとなす点では正しいが、宗教を否定し、宗教を攻撃する意図があつたとなす点では誤つている。ミッシェオはモリエールはキリスト教を否定する意志はなかつたとなす点では正しいが、モリエールの道徳とキリスト教道徳が合致すると主張する点では誤つていると小場瀬氏は述べている。^{②4}

「タルテュッフ」に於てモリエールがどのような態度を宗教に対してとつたかの問題については、ダニエル・モルネは^{②5}モリエールの哲学と呼び得るものでなくても、少くとも人生を送る為に最良のものと彼が判断した考えは「女房学校」のうちに最も良く現れており、「女房学校」に現れているモリエールの考えを当時の思想界の中でどのように位置づけるかによつて「タルテュッフ」に於けるモリエールの宗教との関係も解決されるとしている。そしてその為には1660年頃及びその世紀の終り頃まで道徳の問題、そして一部分宗教の問題がどのように置かれていたかを知る必要があるとしている。

理窟や気質によつてキリスト教の信仰や道徳に敵対的であるリベルタンや不信者を除外し、良いキリスト教徒である人々や、自分達がそうであるかのように話す事を望む人々だけを問題にするならば、そこには総ての道徳や宗教をまきぞえにする戦いに於て互いに反対する二種類の人々が見出される。アニェスが後見人付きの孤児ではなく、「守銭奴」や「タルテュッフ」

や「女学者」に於けるように、彼女をアルノルフのような人にめあわせる事を欲している父親の娘であると仮定すると次のような道徳がある。娘の義務は父に従い、彼の欲する夫と結婚することである。多分その夫が年をとつて、エゴイストで、気難しいならば、彼女は肉に於ては幸福ではないであろう。しかし彼女は重要なただ一つの幸福を持つであろう。それは勇敢に妻として母としての義務を果す幸福である。この世は試煉を逃れる代りに、それを喜びうけねばならぬ涙の谷間である。この厳しい道徳に信者の間で他の道徳が反対していた。それは次のような考えである。

造物主は従うことが容易で喜ばしい衝動や情熱を我々に与えた、それはそれに従えば喜ばしく、戦えば苦しいあるものである。それは人間が与える方向に従つて善くも悪くもなり得る。その一つは全般的な愛、特に性愛である。もし娘が父に従つて不幸であり彼女が聖女や忍従の女でないならば彼女は大いに悪い妻、悪い母となる危険がある。反対にアニェスがオラスと結婚するならば、彼女が優しく、注意深く、忠実な妻となり、良い母となる事は容易な事で、それは彼女にも、道徳にも、社会にも良い事であろう。彼女は神によつて望まれる自然な情熱に従つて満足する。この情熱が常に有害な罠だと思ふのは不条理である。このようにダニエル・モルネは信者の中にある二種類の見解をあげ、当時の思想界で戦われていた問題がこの情熱を軸としたものである事を説いている。^{②6}

一方の側には情熱を弁護する人々がいる。たとえば王の顧問官、マルセーユの司教ニコラ・コエフトーで、彼の著書「人間情熱の絵」は1620年のものであるが、何回も再版され、1660年頃なお読まれていたし、ボワローはその諷刺詩

の中でそれを引用している。彼は情熱は良いか悪いか、情熱はすぐれた徳と両立し得るか否かを問い、両立し得ると考えている。そして「賢い人間は理性によつて大変その情熱を穩かにする事が出来るので、それらは誉むべきで、徳の誇りにふさわしい。それはキリスト教徒の哲学者の間で疑いをいれない事である。……市民生活や人間の会話（即ち関係）から恋を追放することを欲する事は、一年からその最も美しい季節を奪うようなものであるのみならず、その上又、世界から太陽を奪い、世界を恐怖と混乱で満すようなものである。」^{②⑦}と言っている。スノー神父の「情熱の慣習について」は1644年のものであるが、20年後にも非常に読まれた書物として残っていた。彼はその中で罪は情熱を罪あるものとするが、理性は恩寵とともにそれを有効に使う事が出来る。そして輝かしい徳にかえる事の出来ない程悲惨な情熱はないと言っている。^{②⑧}その他、エリー・ピタール、ド・ラ・オゲット、ルネ・バリーなど同様の見解を述べている。

これに反して情熱の敵手は多数で激しい。そして彼等の数と激しさは1660年後増大する傾向にあるように見える。王の最初の侍医マラン・キュロー・ド・ラ・シヤンブルは情熱の敘述と生理学的説明を与えようとする「情熱の性格」という論文の中で情熱に対して厳しい態度をとっている。ジャンセニスト達も同様でニコルはその「道徳論」の中で人間の弱さは情熱に導かれるままになる事にある事を論証している。ラ・ロシュフコー一派も情熱はエゴイズムのマスクに過ぎず悪いものであると言っている。モラリストのジャック・エスプリは1678年の作である「人間の徳の虚偽性について」という著書の中で次のように言っている。「第四の果実は美

しい情熱、美しい魂、偉大な魂があるという大部分の人の陥っている大きな誤りから人が醒める事である。そして情熱や恋や野心が入る美しい情熱と、食欲や官能的快樂のようなきたない動物的情熱に分けることは、同様に奴隷であるので、彼らがつけている足枷の間にある相違を置く事を欲した盲目の人々によつてなされた分け方である事を人が理解することである。」^{②⑨}広く賞味されたモラリストであるベルガルドはこの誤ちの中に詩人や劇作家を加えて小説家の責任を問うている。「小説の作り手の大部分は大きな情熱と接合した大きな徳を我々に現わすことを欲する。しかし彼等が振舞うように、彼等は情熱も徳も知らない。彼等は美しい事を言い、驚くべき冒険を形ずくように見える為に一方及び他方を誇張する。彼等は全く世俗的な女に、最も偉大な聖者がしたよりも英雄的な行為をさせる。彼等は彼女等に絶えず情熱にたずさわらせながら、人が断食と祈りによつてのみ得られる力を与えている。何と言つても無駄である。かくも有害な模範の中に貞潔さを研究しようとする人々は決して貞潔とはならないだろう。」^{③⑩}ボスュエも又そうである。彼はジャンセニストではないがその「情欲論」の中で地上を暗くする情熱や情欲の煙をあげ、そしてその中に「きたない情熱」のみならず、詩や劇を養う情熱をも入れている。フェヌロンはホーマーやヴァージルやテランスを喜びをもつて読んだ人であるが、情熱に対しては強い不信を抱いていた。カトリックと同様、プロテスタントの側でもジャック・アバデイは同様の見解を抱いている。

ダニエル・モルネは以上のように述べ、モリエールの「女房学校」やその他の劇は以上のような二つの思想的態度を背景としておいた中で

理解されねばならないとする。一方の側には我々が餓鬼である事を欲しないなら聖者である事を、信心と果された義務の満足以外の総ての楽しみを憎む事を我々に要求するものがある。他方にはリベルタンヤ公然たる不信者はいなかった。彼等は徳と宗教を愛するが、キリスト教の聖徳のきりたつた道で厳しい羊飼いに従うことが出来るとは感じなかつた人々であつた。彼等は「タルテュッフ」が言うように「人間的で、とりあつかい易い」ことを要求する。モリエールはこの論争を知らないわけではなかつた。そして自分の立場からこの論争に加わつたのである。又、ダニエル・モルネは17世紀がそれを中心に争つたところの「情熱」なる語は「自然」という語におきかえられるものだと言う。^③人が「自然に従う」という時、或る条件下で我々が本能や肉体的衝動や感受性、そして17世紀が情熱と呼ぶものに従う事は良いことで、悪くはないという意味である。そして情熱を警戒し、憎まない人々は自然の善性を信じ、それと戦わない人々である。

モリエールの「自然の哲学」が帰着するのもそれであつて、それはラブレールの流れをくむものである事は前にも見た通りである。小場瀬氏はモリエールの持つ道徳は17世紀のカトリックの道徳とは対蹠的位地にあつたが、モリエール自身はそれを余り意識していなかつたと言つている。モリエールの思想傾向は上に見てきた通りであるが、それは今見たように17世紀のカトリックの道徳と対立し孤立していたわけではない。モリエールは情熱をめぐる一大論争の中に身を投じて、自分の信ずる所から情熱に対して厳しい態度をとる人々に反対し、もつと人間的であらうとする側の人々に組ただけである。そしてダニエル・モルネは次のように述べてい

る。^④「女房学校」について言われたことは「タルテュッフ」についても言われることである。一方に不信者があり、他方に彼等の宗教の厳しい要求について正確に一致する信者だけがいれば「タルテュッフ」は宗教に対する攻撃と考えられるであろう。しかし一方には不信者がいたとすれば、他の端には厳しい苦行のモラルを課する信者がいて、その中間に人間の弱さにその力を越える仕事を課することを恐れ、信心と「社交界」の間の調停を求める信者もいたのである。だから厳しい信者と戦うことは必ずしも不信者に荷担することではなかつた。それはこの中間のより人間的な側に並ぶこともあり得たわけで、モリエールのしたのもそれであると考えられると。

モリエールは「タルテュッフ」の中でクレアントに次のように言わせている。(第一幕第五場)

「しかし心からの信者はすぐそれとわかります。義兄さん、我々の世紀は立派な模範となるような信者を眼のあたり提供してくれていますよ。アリストンを御覧なさい。ペリアンドルを御覧なさい。オロント、アルシダマ、ポリドール、クリタンドルを御覧なさい。彼等にそういう肩書を与えることに何人も異議を持ちません。彼等は決して善徳を吹聴するチンドン屋ではありません。彼等のうちにはあの我慢のならない見せびらかしは少しも見られません。その信仰は人間的でとりあつかいやすいのです。彼等は我々の行動を一々非難しません。そんな訓戒沙汰の中にはあまりにも傲慢さがあると思つていのです。思い上つた言葉を吐くことは人に委ね、我々の行いを戒しめるに彼等自身の行いを以てします。表に現れた悪をあまり信用せず、他人を善意に判断するよう心が来ていま

す。徒党を組んだり、陰謀を逞しうしたりする事
もありません。あらゆる配慮をつくして正しく
生きようとしていることがわかります。罪を憎
んでその人を苛酷に憎むことはありません。あ
まりにも熱心に天の利害を天自らが欲せられる
以上に擁護することはありません。彼等こそわ
が輩であり、これこそあらまほしき態度です。」

ところが一方ではモリエールは「タルテュ
ッフ」の序文の中で自ら次のように言っている。

「喜劇の役目が人間の悪徳を矯正する事にあ
るとするならば、私は喜劇のとりあつかつては
ならない特権のある悪徳があり得よう筈がない
と思う。この作品で取扱つた悪徳は他の総ての
悪徳にもまして国家にとつて大変危険なもので
ある。そして演劇が悪徳の矯正に大きな力を持
つ事は我々の既に見てきたところである。謹厳
な道德の最もあざやかな攻撃も、諷刺のそれに
比して迫力の劣ることがしばしばある。そして
欠陥を描いて見せることくらい大方の人々を良
く誠めうるものはない。世の笑いものにされる
ことは悪徳にとつては大きな打撃である。人は
容易に譴責に堪えるが、嘲笑には堪え得ないも
のである。悪人にされる事は意に介しなくとも、
滑稽と見られることは欲しないのである。」

ここにモリエールの筆になる二つの文をあげ
て見た。一方はクレアントの言葉として、自分
の考えている真の信者は人の行動を非難したり
などせず、他人を戒めるにも自分の正しい行為
をもつてする事を述べた所である。もう一方の
方はモリエール自身が悪徳と考えられるものを
攻撃すべきだし、喜劇の役目はそれだという事
を自ら認めている文章である。前者はモリエ
ール自身の言葉ではなく、劇中人物であるクレ
アントに言わせている言葉であるが、我々はクレ
アントをモリエールの代弁者と認めても良いと

思う。そうするとこの両者の間にある矛盾をど
う解すべきであろうか。クレアントの言葉はタ
ルテュッフの悪徳を攻撃するモリエール自身に
ふりかかり、彼を批判する言葉となるのではな
かろうか。クレアントの言う言葉をもしモリエ
ールが文字通り信じていたのならば、タルテュ
ッフを攻撃する劇を書くべきではなく、自分自
身の正しさによつてタルテュッフの悪徳がおの
ずと戒められるような式の劇を書くべきではな
かつたであろうか。

この矛盾を解決する一つの方向はクレアント
の言葉にあまり重きを置かないことであろう。
小場瀬氏の言うように「タルテュッフ」が物議
をかましてから後、モリエールはこの作品を救
うためにクレアントの言辭を著しく発展させ、
真の信仰と偽の信仰を区別し、自分の非難は後
者にのみ向けられているのだということを明か
にする必要に迫られたのであつて、クレアント
の言説がそのまま作者の考えだとしても、それ
が弁解にすぎぬことにかわりはないと解する方
向である。^③

今一つはクレアントの言葉をモリエールの意
見を代弁するものとして額面通りにとる方向で
ある。モリエールが実際クレアントの言う通り
考えていたとすれば、さきにあげた矛盾をどう
解決すべきであろうか。その場合にはただ一つ
の解決しかないように思われる。

それはモリエールはクレアントの言うような
考えを理想的観念として抱いていたが、現実
には必ずしもそれに拘束されていなかったとい
う考えである。モリエールはクレアントの抱くよ
うな真の信者についての考えを実際に抱いてい
たとしても、それは飽くまでも観念として抱
いていたに過ぎないのであつてその考えが彼の骨
肉と化していたわけでもなく、又そうなるかと

努力していたようにも見えない。クレアントの抱くような真の信者の像はあくまでも理想として認めてはいたが、現実にはそれに拘束されなかつたし、それに近づくともしていなかつた。少くとも「タルテュッフ」に於てはそれを言うことが出来るように思う。鋭敏なモリエールは恐くそれを意識していたのであろうが、この作の場合には彼がとりあげていた偽信者を攻撃するに急で、その気持がこの矛盾を覆つていたものであろう。その意味でこの作もポレミイクの作と言うことが出来るであろう。そしてこの矛盾は後に「人間嫌い」で克服されるものであるが、それは又別の論文で論じたい。我々は前にかなり良く宗儀を守つたモリエールという像を見てきたのであるが、「タルテュッフ」に関して言えば、たとえ宗儀を守つたとしても、あまり熱心なキリスト教信者ではなく、なまぬるい、不徹底な信者であつたことをキリスト教の側から見れば言うことが出来るように思う。

もつともここでキリスト教といつても、それは聖徳の切り立つた険しい道を進み、キリストの教えを守るために自らに難行、苦行を課する種類の厳しいキリスト教ではなく、ダニエル・モルネの言うようなもつと人間的で近ずき易いキリスト教が問題なのである。クレアントの言葉をかりれば「人間的でとりあつかい易い」信仰が問題なのである。

このような信仰においてもモリエールはなまぬるい、不徹底な信者であつたと見なければならぬ。「喜劇瞞着者についての手紙」^{③④}の中に次のような言葉がある。「宗教は少くとも道徳に対する理性の完成にすぎない。宗教は理性を純化し、それを高揚することは確かであり、最後に宗教は完全な理性にすぎない。」^{③⑤}クレアントが「タルテュッフ」の中で発展させている

のもこの考えであつて、宗教がより完全な理性にすぎないならば、それは徳への愛を鼓吹し、その実行をより容易にするであろう。理性は総ての風土、総ての時代の人々の中にある。従つて理性の最高の表現である宗教は教会の外でも教えられるし、宗派と徒党の精神を排斥するものだと言つてゐる。③⑥彼は又純化された理性的なキリスト教は献身的な行為や宗教的徳を排除しない。クレアントはそう言つてゐるが、クレアントの言わないこと、それはその行為や徳が一種のより少い尊重や、ひそやかな不信によつて刻印されていることである。彼はそれらが自然の徳のより力強い発展に帰する場合にのみそれを認めるとアントワヌ・アダムは言つてゐる。③⑦即ちモリエールは彼の「自然の哲学」、自然の善性を信じ、その正常な発展の中に徳の完成を見ようとする態度においてのみキリスト教を許容しているのである。そしてこの「自然の哲学」を抱くことと、彼が不徹底ななまぬるい信者であるということとは矛盾するものではなかつた。

それ故モリエールの思想がルネッサンスの自然哲学の流れをくむものであるとしても、それは17世紀に於てカトリックの道徳と対蹠的地位にあつたと見るべきではなく、宗教の内部でも努力、犠牲、禁欲を説く側と対立していたのであつて、より人間的なキリスト教の抱き方と対立していたわけではないのである。

(注)

- ① Henri d'Alméras : Le Tartuffe de Molière, p. 22
- ② ibid., p. 26
- ③ ibid., pp. 78—79
- ④ 5月14日より8月13日まで (小場瀬卓三 : 「タルテュッフ」研究) P. 153

- ⑤ Henr: d'Almèras: Le Tartuffe de Molière, P.28
- ⑥ ibid., P.90
- ⑦ ibid., P.92
- ⑧ ibid., P.96
- ⑨ ibid., P.100
- ⑩ ibid., P.83
- ⑪ ibid., P.83
- ⑫ Emile Fabre : Notre Molière., P.101
- ⑬ Antoine Adam : Histoire de la littérature française au XVIIe siècle Tom III., P.310
- ⑭ ibid., P.311
- ⑮ Pierre Brisson : Molière, sa vie dans ses œuvres., P.108
- ⑯ ibid., P.108
- ⑰ 小場瀬卓三:「タルテュッフ」研究, P P.236-237
- ⑱ ibid., P P.227-230
- ⑲ ibid., P .229
- ⑳ ibid., P.229
- ㉑ ibid., P.230
- ㉒ ibid., P.233
- ㉓ ibid., P.240
- ㉔ ibid., P.241
- ㉕ Daniel Mornet : Molière., P P.77-78
- ㉖ ibid., P.79
- ㉗ ibid., P.80
- ㉘ ibid., P.80
- ㉙ ibid., P P.81-82
- ㉚ ibid., P.82
- ㉛ ibid., P.87
- ㉜ ibid., P.89
- ㉝ 小場瀬卓三 :「タルテュッフ」研究, P.239
- ㉞ モリエールは「タルテュッフ」が上演禁止になつた後, 1667年8月5日, 「タルテュッフ」を和げて「瞞着者」という題にして発表した, この「瞞着者」の上演後二週間たつて現れたのがこの手紙である。この手紙の作者についてはいろいろ臆測されるが, モリエールの息のかかつた者の手になるか, あるいはモリエール自身の手が加わっていると推測

される。(Antoine Adam : Histoire de la littérature française au XVIIe siècle Tom III, P.311

㉟ ibid., P.311

㊱ ibid., P P.311-312

㊲ ibid., P.312

Le Tartuffe et la religion

Par Yuichi Tokumura

Jean Monval nous montre que Molière était assez pratiquant. Mais pratiquer n'est pas toujours croire. Quelle était donc la position de Molière vis-à-vis de la religion dans le Tartuffe? Voici les paroles que Molière fait dire à Cléante (Acte Ier. Scène V):

Mais les dévots de cœur sont aisés à connaître:

.....

Ils ne censurent point toutes nos actions:

Ils trouvent trop d'orgueil dans ces corrections.

Et, laissant la fierté des paroles aux autres,

C' est par leurs actions qu' ils reprennent les nôtres.

.....

Voilà mes gens, voilà comme il en faut user,

Voilà l'exemple enfin qu'il se faut proposer,

D'autre part, dans la préface du Tartuffe, Molière dit que l'emploi de la comédie est de corriger les vices des hommes en les exposant à la risée de tout le monde. Je pense que Cléante est le porte-parole de l'auteur dans le Tartuffe. Mais en ce cas, les deux opinions susmentionnées ne sont-elles pas contradictoires l'une à l'autre? On ne pourrait penser que les paroles d'un personnage dans une pièce sont l'avis même de l'auteur. Mais en ce cas, les deux opinions sont trop différentes l'une de l'autre. Comment résoudre cette contradiction? On maintient que depuis que le Tartuffe avait été censuré, Molière

était dans la nécessité de distinguer la vraie dévotion de la fausse dévotion et d'expliquer que son reproche ne fût adressé qu'à celle-ci, et que même si les paroles de Cléante sont l'avis de Molière, cela n'empêche pas qu'elles soient son excuse, mais je n'adopte pas cette opinion. Alors, comment faire pour résoudre cette contradiction? On doit penser que Molière se faisait comme idée l'image du vrai chrétien dont Cléante parlait, et que cependant, en réalité, il n'était pas contraint par cette idée. Molière se faisait comme idéal l'image des vrais chrétiens qui ne blâmaient pas autrui et chez qui c'est par leurs bonnes actions qu'ils reprenaient les autres, mais entraîné par ses émotions contre l'hypocrisie, il a peut-être oublié involontairement son

idéal. C'est pourquoi le Tartuffe est la pièce de polémique et ce défaut sera surmonté dans le Misanthrope. Or, la foi que Cléante regarde comme vraie est la foi « humaine et traitable ». Elle est différente de l'autre foi qu'il existait au 17^e siècle, foi sévère qui exige l'effort, le sacrifice et l'ascétisme. Mais on ne pourrait dire que Molière croyait à ce christianisme humain et traitable d'une manière satisfaisante. Il pense que la nature est bonne, et il n'approuve le christianisme que si les vertus chrétiennes aboutissent à un développement vigoureux des vertus naturelles. On pourrait penser que la « philosophie de la nature » de Molière accepte le christianisme humain et traitable sous cet aspect.